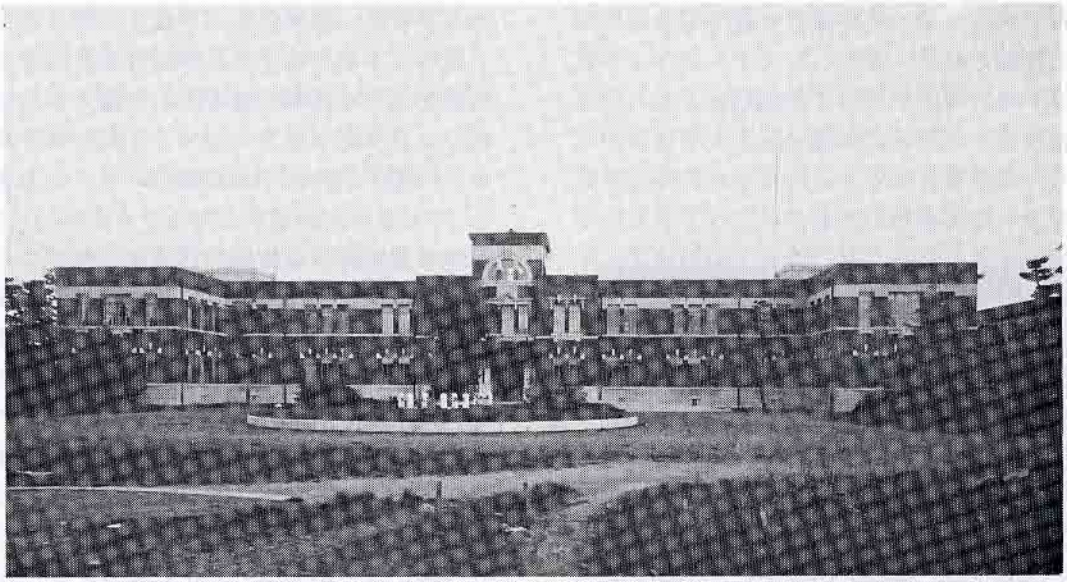
ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第7号　1996.3.10.

目　次

九大（法）保管の「民事判決原本」史料について …… 2
史料紹介（7）…… 4
沿革史紹介（6）…… 6
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿 … 6
受贈図書一覧 …… 7
大学史料室日誌抄録 …… 8



昭和初期の九州帝国大学本部

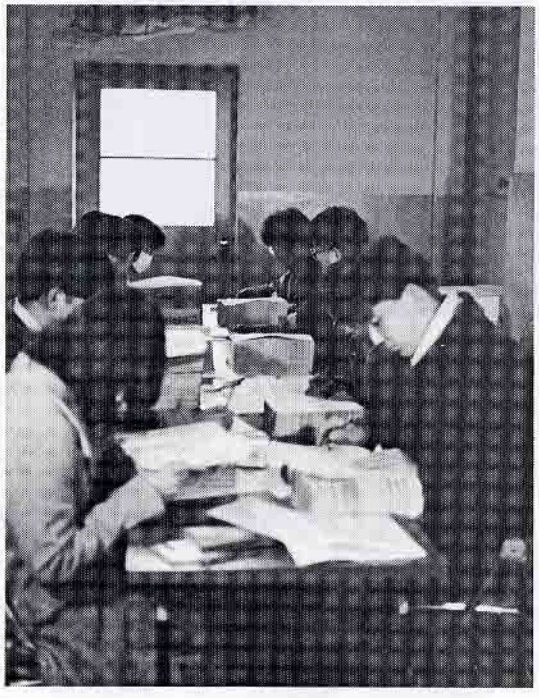
1923年（大正12）12月、古河虎之助の寄付により建てられた工学部本館が火災により全焼した。九大では急遽仮教室を建て対応することにしたが、この復旧にもまた、古河家から寄付の申し出があり、旧本館前に第一、第二新館が建設されることになった。これらには旧本館の煉瓦等が再利用され、1925年（大正14）3月、竣工をみた。このうち第一新館は、工学部仮実験室及び研究室として使用されていたが、医学部から法文学部本館に移転をしていた大学本部が、1928年（昭和3）3月、再度この第一新館に移転をし、以後現在に至るまで、大学本部として使われることになった。上の写真は移転後まもない大学本部である。

九大（法）保管の「民事判決原本」史料について

植　田　信　広

ここに紹介する「民事判決原本」史料は、しかるべき公的恒久保存機関に移管されるまでの間という条件付きで本学が一時的に保管している史料であって、純然たる九州大学所蔵史料とはいえないものである。また、内容的にみて特に大学史に関わる史料というわけでもない。そんなわけで、「大学史料室ニュース」の紙面を割いて紹介することには、いささか躊躇がないでもなかったが、編集部の強いお勧めと、本学における判決原本の保管の現状について広く関係各方面のご理解を求めたいという誘惑に負けて、あえて執筆を引き受けることにした。以下、判決原本の受け入れの経緯、保管の現状と問題点等について簡単に紹介し、責めをふさぐことにしたい。

最高裁が当初平成６年１月から廃棄開始を予定していた、確定から50年以上経過した民事判決原本（最初の廃棄対象は明治初年から昭和18年分までとされていた）が、その保存を強く求める各方面からの運動の結果、幸いにもタイムリミット目前の平成５年12月、辛うじて廃棄処分を免れ、高裁所在地及びその周辺の全国10国立大学法学部に分散して一時保管されることになったのは、新聞報道等を通じてご存知の方も多いことと思う。



史料調査風景

このうち福岡高裁管轄の九州・沖縄地区分については、熊本、鹿児島両地裁及びその管轄の支部・簡裁に保存されてきたものを熊本大学の担当とし、それ以外の分の保管を本学法学部が担当することになった。受け入れに際して本学部が最も苦慮したのは、キャンパス移転を控えてただでさえスペースに余裕のない本学構内に、書棚に並べた状態で180メートル近くに達するという大量の史料を収蔵でき、かつその貴重な価値にふさわしい保存環境をも備えた保管場所を確保できるだろうかということであった。しかし、これについては、吉村・小山両元法学部長らの尽力と全学の理解によって、幸い旧法文学部棟の４階の元会議室を書庫として提供していただけることになり、後で述べるように保存環境面での難点は抱えつつも、とりあえずスペース面の不安は解消されたのである。

さて、各地の保存裁判所から大学側への判決原本の移管は、原則として平成６年度中に行うこととなり、本学の場合、６年12月22日に大分地裁を始めとする６箇所の裁判所から搬入されたのを皮切りに、７年３月末にかけて合計39箇所の裁判所から、全部で段ボール565箱分の受け入れを完了した。保管場所が法学部の施設から距離的に遠い上、各地の裁判所から散発的に搬送されてくるため、搬入作業にはかなり苦労したが、学部の事務方および助手院生諸君の献身的な協力のおかげで、何とか予定通り作業を終えることができた。今ではなんだか随分以前の出来事のような気がするが、今更ながら各位の協力に感謝の念を禁じ得ない。

搬入作業完了直後には、段ボール箱内の簿冊数を確認するとともに、緊急に手当を必要とするような特にひどい史料の劣化の有無を知るためのごく簡単な点検作業を、これも助手院生諸君を大量動員して行った。その結果、簿冊数は全部で2923冊であること、また大半の史料の保存状況はかなり良好であることなどがわかった。因みに、各保存裁判所ごとの内訳簿冊数を示せば右表のとおりである。

なお、受け入れ簿冊総数については、当初2777冊と勘定し、その旨報告していたが、実はその後の再点検によって、私の単純な計算ミスによる誤りだったことが判明した。なんとも間の抜けた話

であるが、これまで間違った数字を報告してきた関係各方面に、ここでお詫びと訂正をしておきたい。次に、史料の内容的な面については、詳しくは今後の本格的な調査研究をまつしかないが、相当数にのぼる明治期の民事法制整備以前にかかる判決(その最古のものは、佐賀地裁本庁に保存されていた明治6年8月付けの三潴県による「品物売込代金差縺事件」判決と思われる)をはじめ、日本近代法史はもちろん、九州地域における法慣行や政治史、社会史等に関する史料の一大宝庫であることは疑いない。その後、平成8年1月には福岡県立柳川古文書館の中野等、江島香氏等の協力を仰ぎながら、簿冊1冊ごとについてのより本格的な保存状態調査に着手し、間もなくその作業を終える手筈となっている。この調査に基づいて、防虫等の必要な保存対策を施すとともに、簿冊ごとにその史料の傷みの補修や表題と判決裁判所(保存裁判所と同一とは限らない)を記載した目録を作成するというのが次の段階の作業課題である。

保存裁判所名	簿冊数	保存裁判所名	簿冊数
福岡高裁本庁	14	福江支部+同簡裁	33
福岡地裁本庁	506	厳原支部+同簡裁	30
飯塚支部	15	島原簡裁	53
小倉支部	152	平戸支部+簡裁	50
久留米支部+同簡裁	293	壱岐簡裁	17
柳川支部	155	大分地裁本庁	101
八女支部	13	杵築支部	19
飯塚簡裁	57	中津支部+同簡裁	96
直方簡裁	15	日田支部	37
田川簡裁	27	竹田支部+同簡裁	93
小倉簡裁	258	豊後高田簡裁	9
行橋簡裁	72	佐伯簡裁	19
佐賀地裁本庁	239	宮崎地裁本庁	196
武雄支部	85	日南支部	38
唐津支部	70	都城支部	62
長崎地裁大村支部+同簡裁	39	延岡支部	60

最後に、判決原本保管に関する今後の大きな課題について簡単に触れておきたい。その第一は、判決原本の閲覧利用の希望に対してどのように対応すべきかという問題である。これについては、主として①事件関係者のプライバシー保護のために、どのような利用基準を設けるべきか、②現状の予算、人員の下で物理的にどの程度の利用体制を組むことが可能か、という二つの側面から検討する必要がある。①については、保管10大学の連絡会議等で検討を行っている最中で、近いうちに最終結論を得る予定であるが、筆者個人としては、利用目的を原則として「学術研究」に限定することとし、逆にそれ以上の制限は課さない方式が望ましいと考えている。本学部の場合、より深刻な問題は②にあげた点である。保管大学には判決原本の閲覧利用のために必要な予算、人員、設備等の措置が新たにとられるわけではなく、ましてや本学部の場合、保管場所へのアクセスがかなり不便だという事情もあいまって、本格的な閲覧利用サービスに踏み切ることは、現状ではそもそも物理的に不可能と判断せざるをえない。仮に、閲覧利用を認めるとしても、残念ながら極めて限定的な利用(例えば1～2か月に1回の事前予約による実施方式等)に止まらざるをえないだろう。いずれにせよ、①の点について連絡会議としての結論を得るのが先決であるが、今から頭の痛い問題ではある。

第二は、現在の保管環境の問題である。なにぶん建物全体がかなり老朽化しているため、保管場所も夏季の高温多湿化その他、史料の保存環境の面ではお世辞にも良好とはいえない。それどころか、史料保存学の専門家からは「10大学中最も劣悪な環境」という何とも不名誉なお墨付きを頂戴しているくらいである。筆者自身、もし万一恒久保存施設への移管計画が難航するような事態にでもなったら、史料の保管責任上、より良い環境の新たな保管場所探しをも含めた抜本的な保管環境改善策を追求せざるをえまいと考えている。

こうした課題を解決し、判決原本の本格的な公開利用を推進するためにも、一日も早い公立の司法資料保存機関の新設が望まれる。本学部としては、それまでの間、細心の注意をもってこの貴重な史料の保管にあたるとともに、条件の許す範囲で極力その利用に対する要望にも応えていく道を探るほかなかろうと筆者は考えている。

(付記:判決原本保存問題の経緯、および各大学における判決原本の受け入れ・保管の現状については、『ジュリスト』1040号、同1078号等に関連記事が掲載されている。詳しくはそれらも参照されたい。)

(九州大学法学部教授)

史料紹介（7）

九州帝国大学工科大学要覧

1914年(大正３)７月５日、工科大学大講堂において、九州帝国大学卒業証書授与式が挙行され、第２代総長真野文二から医科大学57名、工科大学54名に卒業証書が授与された。この卒業証書授与式は、1911年（明治44）１月、新たに設置されることになった工科大学と、既に1903年（明治36）４月から設置されていた京都帝国大学福岡医科大学が、両者合併することにより創立された九州帝国大学にとっては、第３回目の卒業証書授与式にあたっていたが、1911年から始まった工科大学としては、最初の卒業式であった（第１回、第２回は医科大学のみ)。

今回紹介する『九州帝国大学工科大学要覧』（下写真）は、九州帝国大学がこの工科大学第１回卒業証書授与式にあたり、その記念として刊行したもので、卒業証書授与式参列者やその他の関係各所に配布されたものである。

大きさは菊判(636mm×939mm)、印刷所は東京市京橋区の株式会社東京築地活版製造所であった。本文は54頁ほどであるが、巻頭に「工科大学正面」～「第四分館物理実験室」までの写真32枚と、「九州帝国大学工科大学平面図」１枚（右頁）が付けられている。

『九州帝国大学工科大学要覧』（大正三年七月）

工科大学の写真集としては、最古の部類に属すものと思われ、1916年(大正５)11月、大正天皇来学に際して作製された『九州帝国大学要覧』（写真集）よりも、２年ほど古い。工科大学の建物・研究室だけではなく、当時最新の実験器具等が写った写真も所収されており、これらの中には学術史上貴重な史料も含まれているものと思われる。

「九州帝国大学工科大学平面図」は、1912年(大正１)以来毎年刊行されている『九州帝国大学一覧』の巻末にも付けられているが、本要覧のものは縮尺が大きく、また道路や植え込み等が詳細に描き込まれている点に特徴がある。同図に見える建物は、現在はそのほとんどが取り壊されており、わずかに左下端の正門と門衛所が、現在の地に移築されて残っているだけである。

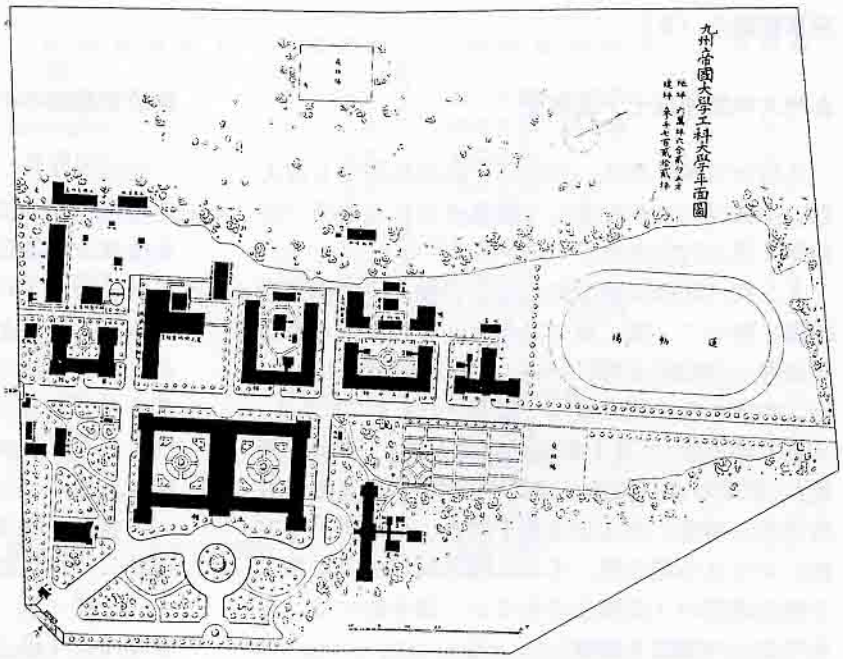
次に本文部分は、「沿革略／敷地及建物／職員／学課及設備ノ概況／土木工学教室／機械工学教室／電気工学教室／応用化学教室／採鉱学教室／冶金学教室／結論／学生及生徒ニ関スル諸表」からなり、これらの項目中にも口絵写真に劣らず重要な史料が多い。

例えば「土木工学教室」以下、各教室の説明には、各学年で履修すべき学科名・時間数を定めた「学科課程」や、図書・器械・実験室の諸施設についてふれた「設備ノ大要」、卒業論文のことについて述べた「実習及卒業論文」が収められている。本要覧は「大学案内」や「履修要項」等とも類似した機能を持つ刊行物であり、創設当初における工科大学の教育・研究体制の実態を知ることが出来る。

ためしに「冶金学教室」の「実習及卒業論文」の部分と、本要覧の「結論」の部分を引用すれば、「実習及卒業論文　本学科ハ其ノ性質上実地ノ見学ヲ要スルコト甚切ナリ幸ニ我カ大学ハ製煉所、金属山ノ如キヲ四隣ニ有スルニ依リ学生ヲシテ是ニ就キ屢々見学実習セシメ以テ其ノ利ヲ享有セシメツヽアリ而シテ第二学年ヲ終ルノ後七月ヨリ十月迄ノ間指定ノ鉱山若シクハ製煉所等ヲ見学セシメ其ノ報告ヲ徴シ竝ニ卒業論文ヲ提出セシム」(46頁)、「結論　（中略）此間ニ於ケル研究ノ結果ハ既ニ紀要第一冊第一号トシテ発表セラレ近ク刊行セラルヘキ（中略）第一回卒業生ヲ出スノ機運ニ会セリ今後一層奮励シテ教授研究両方面ノ努力ヲ怠ル無クンハ庶幾クハ以テ邦家ノ期待ニ負ク

ナキヲ得ン乎」（47頁）というものであり、「基礎学ノ上ニ立チテ廣ク実地ニ活用センコトヲ期」（15頁）すという、本学工科大学の特徴と、草創期にあった同大学の意気込みをよく表している記事といえよう。

ところで、1914年（大正３）の卒業式については、九州帝国大学発足以来、未だいわゆる開学式が行われていないので、工科第１回卒業と工科本館等の落成（1914年３月）を機に、全学的な記念式典として挙行しようという計画がなされていた。この計画は、明治天皇の諒闇中ということで、正式には中止されたが、下にも見るように実際には創立関係者を招いた卒業式や学内開放が行われており、事実上は一種の開学・落成式典であった。



九州帝国大学工科大学平面図

九州帝国大学工科大学の創設事情については、本要覧の「沿革略」にもあるように、福岡県・福岡市・箱崎町や古河財閥等、官民に渡る尽力が知られている。工科大学創立費として、福岡県が25万円、福岡市・粕屋郡・箱崎町が計８万７千930円の寄付を行い、それに当時足尾鉱毒事件で厳しい世論にさらされ、公共的献費で世論を緩和しようとしていた古河家から、工科大学各教室等の建築費、60万８千50円の献納が申し出された（『九州大学五十年史　通史』88頁以下）。先の記念式典は、これらの協力に対する謝意の意味もあって、挙行されたのである。

工科大学第１回卒業式の前年（1913年11月）に行われた医科大学の十周年記念は、「紀念祝典を挙げる以上それに相当した設備を要するのみならず、学術研究を公表せねばならぬ」という理由で大学主催の記念式典が見送られ、学生の主催で記念行事が開催されたが（『九州帝国大学医科大学祝賀会記録』２頁）、九州帝国大学と同時に発足した工科大学の場合には、大学の主催として卒業証書授与式を始めとする一連の行事が行われた。工科大学には卒業式準備委員が置かれ、『工科大学要覧』の編集をはじめ、帝国大学（工科大学）創立当時の関係者や協力者、県・市・町会議員への招待状発送等、事前の準備も念入りになされている。

また、工科大学第１回生の卒業に際しては、卒業証書授与式だけではなく、一般公衆の学内観覧等、他の催しも行われた。卒業式翌日の一般学内観覧には、開始時間前に多くの市民が「門前ニ押シ掛ケ」、その合計は2,700名にのぼったという。同日午後にはまた、工科大学教授大竹太郎による「電気ノ起ス危害ニ就テ」と、同じく西田精による「水道ノ話」の講演会が開かれ、各々200余名の聴衆が集まった。さらに翌々日には、福岡師範学校、福岡農学校、福岡工業学校、箱崎町高等小学校等の学校団体観覧も実施され、約2,500名の観覧者があった。３日間の日程で、観覧者延5,300余名という盛況ぶりである。

卒業式に伴う九州大学の学内観覧（開放）は、1916年（大正５）以降、式典との混乱を避けるため、帝国大学令公布記念日の３月１日前後に行われるようになり、大正後半期には隆盛を迎えるが、工科大学第１回卒業証書授与式に際して行われた学内観覧（開放）は、その嚆矢といえる行事であった。

なお、本学では工科大学の創設以後、1919年（大正８）２月に農学部、1924年（大正13）９月に法文学部が新設された。両学部は先の工科大学の例に倣い、それぞれに第１回生の卒業する1924年（大正13）３月と、1928年（昭和３）３月に記念式典を挙行したが、その際にはまた、記念の刊行物が作製され、式典来賓等の関係者に、それぞれ『九州帝国大学農学部要覧』、『九州帝国大学法文学部概況』が配布された。　（O）

沿革史紹介（6）

九州大学医学部七十五年史

九州大学医学部は、1978年、創立75周年を迎えた。本書はこれを記念して編集されたもので、1979年6月に刊行されている。

A5判、639頁。医学部は自らの歴史＝学部史の編集に熱心で、既に創立25年と50年にあたる1928年10月と1953年5月に、各々年史を刊行していたが、本書もその例に倣って編集されたものである。「五十年史抄」「五十年以後現在まで」「事項別概況」「教室および施設・部門の沿革」「創立七十五周年記念事業」からなる第1部と、「資料」「現況」からなる第2部、それに医学部前史等に関する特別寄稿の3部構成であるが、基本的には『五十年史』の構成を踏襲している。

ただし、『五十年史』の縦組は横組に変更され、判型もB5判からA5判と小さくなった。内容的には、対象期間に大学全体を揺るがしたいわゆる紛争期が含まれており、これについての記述が相当数見られること、「九州大学医学部前史」等、福岡地方の医学史に関する研究論文4編を集めた特別寄稿等に特徴がある。

経済学部60年小史

1924年9月に創設された法文学部を前身とする本学の経済学部は、1984年、創立60周年を迎えた。本書はこれを記念して編集されたもので、1984年11月に刊行された。A5判、横書き。「小史」とあるように、全部で28頁の冊子に過ぎないが、これは1978年11月、法文学部創設50周年の際に、500頁を越す大冊の年史（『筥崎松原の青春』）が出されており、基本的にはその後の10年間を対象に、編集が行われたためである。

内容は「経済学部の略史」「経済学部年表」「旧教官」「歴代の経済学部長」等からなり、このうち、「第一章　法文学部時代」「第二章　経済学部時代」「第三章　経済学部の新展開」の3章からなる「経済学部の略史」が、21頁とその半分以上を占めている。

この「略史」には九州大学経済学部史の流れが要領よくまとめられているが、特に「経済学部の新展開」には、経済工学科の設置、講座制の大講座化等の記述がなされており、経済学部の現況を知る上で参考となる。

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	○比文研	教授	有馬　學
副委員長	○農学部	教授	深尾　清造
副委員長	○石炭研	教授	東定　宣昌
	○文学部	助教授	佐伯　弘次
	○教育学部	助教授	新谷　恭明
	○法学部	教授	植田　信廣
	○経済学部	教授	荻野　喜弘
	○理学部	教授	柳田　壽一
	○医学部	教授	多田　功
	歯学部	教授	坂井　英隆
	薬学部	教授	前田　稔
	工学部	教授	長田　正
	数理研	助教授	川崎　英文
	総理工	教授	本地　弘之
	生医研	教授	木村　元喜
	応研	教授	高橋　清
	機能研	教授	西村　幸雄
	健セ	助教授	冷川　昭子
	言文	助教授	金子　暢良
	医短	教授	吉本　清一
	医病	教授	野瀬　善明
	歯病	教授	池本　清海
	生環研	助教授	北野　雅治
	熱研	助教授	林　靜夫
	情セ	助教授	古川　善吾
	アイセ	教授	大崎　進
	中央分析	助教授	坂下　寛文
	遺伝情報	教授	服巻　保幸
	留セ	助教授	岡崎　智己
	有化研	助教授	菊池　純一
	大教セ	助教授	小山　紘三
	先端セ	助教授	中島　寛
	○大型	助教授	天野　浩文
	図書館長		小山　勉
	学生部長		西村　重雄
	事務局長		牛尾　郁夫

○は専門委員会委員

（1995年12月1日現在）

受贈図書一覧（1995年7月～12月）

東京大学史史料室ニュース　第14号
　東京大学史史料室　1995．3
東京大学史紀要　第12号
　東京大学史史料室　1994．3
すゞかけ　第15号
　九州大学医療技術短期大学部　1995.10
國學院大學百年史　上巻、下巻
　國學院大學　1994．3
同志社談叢　第15号
　同志社社史資料室　1995．5
サティア《あるがまま》　第19号、第20号
　東洋大学井上円了記念学術センター
　1995．7、1995.10
武蔵学園史年報　創刊号
　武蔵学園記念室　1995．7
春日市史　上巻、中巻、下巻、資料編
　春日市　1994．3～1995．3
21世紀へのパラダイムシフト―転換期の大学と学問―
　広島大学総合科学部　1995．2
新聞にみる福岡県女性のあゆみ　明治・大正編
　福岡県企画振興部県民生活局女性政策課
　1993．3
明治期における不敬事件の研究―111事例の概要と文献および明治期不敬事件史試論―
　小股憲明　平成5･6年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書　1995．3
高等学校における不敬事件―明治期不敬事件の事例として―（一）（二）
　小股憲明　人間関係論集　No.11、No.12
　1994．3、1995．3
九州工業大学へ　明治専門学校40年の軌跡
　野上暁一　1994．5
永田武明教授退官記念業績集
　永田武明教授退官記念事業会　1995．8
改訂新版　大学事務職員必携―国立学校等管理運営の手引―
　文教ニュース社　1985．7
国立学校特別会計制度のあゆみ
　第一法規出版　1977．6
国立大学財政制度史考
　第一法規出版　1964．3
国立大学ルネサンス―生まれ変わる「知」の拠点―　1、2
　同文書院　1993．3
福岡教育大学　四十年の歩み
　福岡教育大学　1989.11
会報　第34号
　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会　1995．9
国立学校退職者名簿　平成六年度
　官庁通信社　1994．7
岡増一郎教授業績目録―退官記念誌―
　九州大学歯学部口腔外科学第2講座同窓会及び岡増一郎教授退官記念実行委員会　1995．5
島根医科大学開学二十周年記念誌
　島根医科大学　1995.10
井上円了センター年報　第4号
　東洋大学　1995．7
DJIバイマンスリーレポート　創刊2号　No.5
　国際資料研究所　1995.11
同志社の開校と京都
　同志社社史資料室　1995.11
Museum Kyushu　第1号～第50号
　博物館等建設推進九州会議　1981．1～1995．6
名古屋大学五十年史　通史1、通史2
　名古屋大学　1995.10
不撓の軌跡　昭和20年東大物理学教室の男たち
　城島明彦　1992．7
九州帝国大学法文学部概況
　九州帝国大学法文学部　1928．3
Selected Papers of Yoshiya Kanda
　廣川書店　1982．8
20年のあゆみ―閉校記念誌―
　九州大学医学部附属診療放射線技師学校同窓会
　1973．8
責善会誌　第参拾四號
　明治専門学校責善会雑誌部　1930.10
大学の庭　上、下
　弘文堂　1964.12
近代日本の私学―その建設の人と理想―
　有信堂　1972．3
高校教育多様化と入試制の問題―その実態と解明―
　労働旬報社　1968.11
大学の多様な発展を目指して　Ⅰ―大学審議会答申集―
　ぎょうせい　1991．8
大学の多様な発展を目指して　Ⅱ―「平成5年度以降の高等教育計画」と「大学院の整備充実」―
　ぎょうせい　1991．9

大学の多様な発展を目指して　Ⅲ－設置基準の解説とQ＆A－
　ぎょうせい　1992. 7
五十年史　九州大学医学部
　九州大学医学部五十周年記念会　1953.12
九州大学医学部放射線科学教室　五十年史
　九州大学医学部放射線科学教室同門会　1979.12
明治専門学校概覧
　明治専門学校　1934. 5
撫松余韻
　松本健次郎　1935.12
松本健次郎懐旧談
　鱒書房　1953. 3
九州工業大学七十五年
　明専会　1984.11
日本学術会議25年史
　学術資料頒布会　1977. 7

大学史料室日誌抄録（1995年7月～12月）

7.18（火）　庶務課より史料受領。
8. 4（金）　国際交流課に資料貸出（旧制福高一覧、アルバム等）。
9.20（水）　「大学史料室ニュース」第6号刊行。
9.26（火）　有馬學比較文化研究科教授より史料寄贈。
10.13（金）　吉本清一医療技術短期大学部教授より資料寄贈。
10.16（月）　折田講師、東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会参加（～19日。於名古屋大学等）。
10.25（水）　折田講師、平成7年度九州大学中堅職員研修において「九州大学の歴史」講義。
10.26（木）　第14回運営委員会。
11. 1（水）　『大学史料叢書』第4輯発注。
　有馬學委員長、平成7年度中国・四国・九州地区国立学校等広報・文書研究協議会において「国立大学等における公文書の管理と保存」講演。
11. 2（木）　古賀宏医療技術短期大学部元教授より史料寄贈。
11.20（月）　庶務課より史料受領。
11.27（月）　大学入試センター福岡進学情報サービス室より史料寄贈。
11.29（水）　「大学史料室への印刷物の送付について（依頼）」を各部局事務（部）長等宛て発送。
12.20（水）　九州大学新聞部より九州大学新聞寄贈。
12.22（金）　庶務課より史料受領。
12.25（月）　宮内庁書陵部編修課員、昭和天皇行幸啓関係資料収集現地調査のため来学。
12.26（火）　庶務課・秘書掛より史料受領。

九州大学大学史料室ニュース　第7号
Archives of Kyushu University

発行日　1996年3月10日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学史料室
〒812-81 福岡市東区箱崎6－10－1
電話（092）641-1101　内線 2298
印刷　九州大学印刷所